2012年（平成24年）
第52号
（4月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

釈尊の生誕に寄せて　～“いのち”の花を咲かせたい～

降誕会・花まつりを開催　～京都教会～

４月８日（日）、京都教会において降誕会式典と花まつりが行われた。釈尊は紀元前５世紀頃、北インド・カピラヴァストゥという国（現ネパール領土）のルンビニ園で、シュッドーダナ国王とマハー・マーヤー夫人との間に生まれ、シッダールタと名付けられた。

釈尊の生誕を祝うとともに、尊い教え、かけがえのないいのちを頂いた有難さをかみしめるため、感謝の気持ちをもって、降誕会の式典が行われた。

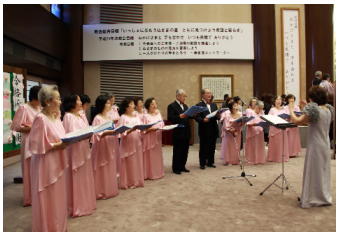
式典では、佐藤教会長導師による読経供養が行われ、会長先生の啓白文を代読。その後、東山普門太鼓のお祝いの演奏があり、引き続き、ちびっこの司会で「花まつり」が行われた。

最初に合唱団「コールコスモス」の合唱をバックに１０組の夫婦による奉献が行われ、婦人部長とちびっこが聖壇にあがり読経した。続いて、子供たちの代表による、降誕を祝う「稚児讃嘆文」が奏上された。

降誕会式典

東山普門太鼓

ちびっこによる司会



コールコスモス

稚児讃嘆文奏上

花御堂に甘茶をかける

その後、教会に集まった数十名の子供たちがゲームを楽しんだ。次に新１年生が壇上に上がり、一人ひとり紹介され、場内から祝いの拍手を受けた。

新１年生を紹介

最後に佐藤教会長より釈尊生誕の意義に寄せて「一人ひとりがいただいた『いのち』を生かしてもらいたい」と述べた。

降誕会にあわせ、青年部・学生部の部員により、参拝者からＷＣＲＰ日本委員会の東日本大震災被災者支援の募金を集めていた。また、教会の前でサリー姿の青年女子部員が、通行される市民や観光客に対して、釈尊の生誕をＰＲするために、甘茶を配布していた。

お知らせ（５月の教会行事）

５月　１日（火）朔日参り・布薩の日　9：00～
１０日（金）脇祖さまご命日　9：00～
（教会長　大法座）
１２日（土）庭野平和賞シンポジウム
（会場：ひと・まち交流館）
１５日（火）釈迦牟尼仏ご命日　9：00～
（家庭教育、夜間は支部で）
２７日（日）青年の日（教会・市内にて）

時事刻々

先日、四条大和大路で一瞬にして７人のいのちを奪う悲惨な事故が起こった。亡くなられた方のご冥福と負傷された方の一日も早いご回復をお祈りしたい▼京都の観光を楽しんでおられたのに、一転して悲しみに見舞われた。まさに『一寸先は闇』だ▼京都に住む者はほとんど今回の事故現場に行った記憶はあるだろう。青信号で横断歩道を渡っているのに、横から自動車が突っ込んでくると誰が想像しただろうか▼かといって不安や心配ばかりしていては何も手がつけられない。ならばどうすればよいのか。この疑問に答えを与えてくれるのが『信仰』だろう▼昨年の東日本大震災では『想定外』という言葉が頻繁に使われた。だから、これまでの想定を見直し大幅にハードルを引き上げた対策を立てようとしている▼どんな対策を実施しても、不安の種は絶えない。『一寸先も明』と思えるようになることが大切だと思う。

平成２４年、私たちは「おかげさまと手を合わせ　いつも笑顔でありがとう」を実践します。

釈尊生誕を祝う ～おしゃかさまをたたえるタベ～

4月8日午後4時半から、京都全日空ホテルにて、京都仏教会が毎年実施している「おしゃかさまをたたえる夕べ」が行われた。

今年の法楽は泉涌寺御一山によって執り行われ、その後「原発だけはあきません」と題して京都大学原子炉実験所助教の小出裕章氏による講演があった。

京都教会からは、佐藤教会長、平井総務部長、大森教務部長の3人が参加した。

春季彼岸会　各地で開催

3月20日前後、各地で支部1ヶ所から10ヶ所に分かれて、春季彼岸会が行われた。

ご宝前の前には、会員たちが持ち寄った食事や菓子などが供えられていた。読経供養の際に、事前に集めた会員各家先祖の霊、戒名を読み上げられ、先祖供養を行った。

ご供養後、研修や法座を通して、参加者は学び合い。その後、お供えをみんなで分けて、共にいただきながら、親睦を深めていた。

秋季彼岸会は、教会で実施される予定。

爽やかに第２６回福知山お城まつり

4月7～8日、第26回福知山お城まつりが開催された。テーマは「～笑顔が集う　春の福知山(ˆ▽ˆ)～」。8日のパレードに京都教会から青年部7名が福知山教会の青年部員と共に参加し、大会を盛り上げた。一つの纏（まとい）を全員で振ることで一体感が実感でき、同じ京都府の信仰青年として更なる精進を誓った。

アフリカへ毛布をおくる運動がスタート

4月1日、朔日参りの式典終了後「アフリカへ毛布をおくる運動」の開始式が行われた。同運動の映像鑑賞後、進め方の説明があり、最後に佐藤教会長から心構えがあった。

説明を聞いていた会員から、早速「毛布の送料に」と実行委員に手渡していた。京都では毛布の収集5月25日までとしている。

講演会のご案内

庭野平和賞シンポジウム　5月12日に実施

公益財団法人庭野平和財団（名誉会長：庭野日鑛、理事長：庭野欽司郎）の第29回庭野平和賞は、コナビグア(CONAVIGUA－連れあいを奪われた女性たちの会)共同設立者で2010年までその代表をつとめ、現在は財務部門を担当しているグアテマラ共和国のロサリーナ・トゥユク・ベラスケス氏に贈られる。（3月号本紙に掲載）

平和賞贈呈式は、5月10日に東京で行われる。庭野平和賞シンポジウム・記念講演は、5月12日に京都で行われる。

シンポジウム・記念講演は、京都市下京区の「ひと・まち交流館」で開催される。例年は京都普門館において実施されてきたが、今回は、一般施設を利用することになった。

●我（我を張る、我を捨てる）

（校成会のことば）

私たちは自分の力で生きているように錯覚しがちですが、実は他の人とお互いに支え合って生きています。そうした真理を忘れて自分だけの考えを押し通そうとして自分中心の生き方をすることを「我を張る」といいます。それでは自分自身の生き方をどんどん狭くし、自分を不幸にしてしまいます。

そんな生き方をしている人に、先輩幹部が「我を捨てなさい」とご指導します。このご指導に対して、「我を捨てたら、自分がなくなってしまう」と反発する人もいるでしょう。しかし、「我を捨てる」ことは決して自分がなくなることではありません。私たちの心の中には、凡夫＝小我と、仏になれる心＝大我の二つの「我」があります。

校成会でいう「我を張る」とはこの小我を張ることであり、その小我を捨てることによって大我に目覚めれば、そこに“真の我”が表れてくるのです。要は、人間の本性・本質である仏性（真の我）の開顕ほ妨げている小さな我を捨てることが幸せになる近道であるということです。

今月の言葉　～人は何のために生きるのか～　京都教会長・佐藤益弘

ようやく暖かな季節となり、待ちに待った桜の開花を観られる時期を迎えました。京都には大勢の観光客がお見えになり、いっそう街全体が華やかになっています。また、私どもの機関誌『佼成』４月号の表紙も、桜が咲き誇る大樹の絵で飾られています。そうした様々なご縁を通して、あたたかさを授けてくださっている仏さまに手を合わさずにはおれません。

さて、今月は機関誌『佼成』において、会長先生から**「生きている意味」**というご法話をいただきました。その中で、私は大きく３つのことが大切であると学ばせていただきました。

１つ目は、「私たち人間は、究極のところ、絶対かつ無限で**永遠の世界と一つ**であること、その自覚に立って人生を歩んでいくことが大切である」というところです。ここで、開祖さまが幼少の頃に、自宅の神棚や仏壇、両親をはじめ家族、小学校へ通う道中にある神仏などに手を合わせ拝む日々を過ごしておられた話を思い起こします。そのあらゆるものを拝む姿、そして拝む心こそが、永遠のいのちと一体となって生きる具体的なお姿ではないかと思います。開祖さまに倣って、永遠のいのちに生かされ生きることの有り難さをかみしめ、すべてのご縁が自分のいのちを生かしてくださっているという感謝の念をもって生活させていただきたいと思います。

２つ目は、「永遠のいのちとは何か、真理の世界と一体とはどういうはたらきをいうのかを、生身の体をとおして、**一生学び続ける**ところに、私たちが生きている意味がある」というところです。中西玄禮・永観堂禅林寺法主さまから賜りました『げんれい説法』というご著書のなかに「聞法歓喜」ということが書かれてあります。そこには、人生を生きぬくために３つの必要な知恵として、①書を読む②人に出会う③旅に出るということが示されてあります。さらに大切なこととして法を聞くことによって仏さまの知恵と慈悲とが私たちに働きかけてくださっていることを学びとることであると教えてくださっています。私もそうした求道心を持ちつつ根本的なことを一生学びつづけていきたいという気持ちを新たに致しました。

そして３つ目に、「**すべての人に安らぎを与える**ことが『生きている意味』であったといえます。釈尊がそうであったように、私たちがご法の習学をとおしてなすべきことはただ一つ、多くの人に真理をお伝えし、安らぎを得ていただくことに尽きます」という点が重要であると受け止めました。先日、２年ほど前に埼玉県川口市から京都に転居された会員さんから伺った話ですが、「佼成会草創期の頃、開祖さまと脇祖さまが自転車で信者さんの救いのために東京中野から鳩ヶ谷市（川口市に隣接）まで布教されたのだそうです。「我が家にも来ていただきました」と証言する信者さんが何人もいらしたというから驚きです。距離にして２０ｋｍはあったものと思います。両祖さまは、たとえ遠方であっても多くの人に尊い真理・法をお伝えし、信者さんに安らぎを得ていただく行に徹しられました。そうした師のお姿を忘れことなく、すべての人に安らぎを得ていただくために自らのお役を果たしたいと、心を定めた次第です。

「天上天下唯我独尊」とは、宇宙に存在するすべてのものは、仏のいのちを具えた尊い存在であると会長先生から教えて頂いております。その誕生偈の本当の意味を承知しつつ、今月も精進させて頂きます。

深草墓園春季慰霊法要

３月 19 日（月）、京都市深草墓園において春季慰霊法要が行われた。この法要では京都市内の各宗派の代表者等を招待しており、京都教会からは佐藤教会長をはじめ、５名が列席した。

同墓園では毎年春秋の彼岸ごとに、墓園に眠る慰めるために式典を開催している。昭和 33 年 7 月に墓園が開設されて以来、毎年実施されており、今回で 108 回になる。慰霊法要は２部構成で、１部は京都市が主催する「慰霊式典」を、２部は遺族会が主催する「法要」を実施した。慰霊式典では、門川大作・京都市長の式辞（副市長代読）に始まり、京都市議会議長と遺族代表の弔辞、遺族代表の献花が行われた。

今回の法要は、天理教京都教区の奉仕によって執り行われ、奏楽が奏でられるなか、祭主・祭員入場、祓詞（はらいことば）奏上、大麻（おおぬさ）行事、献饌（けんせん）、祭詞奏上、祭員列拝（れっぱい）、祭主及び来賓者の玉串奉献が行われた。その後参加遺族の焼香があった。

庭野開祖の宗教観･平和観　「一乗の道」

≪昭和から平成へ≫

昭和 64 年 1 月 7 日､テレビのニュースが天皇陛下のご容態の悪化を報じた。陛下のお体の具合が良くないことは、前年の秋から伝えられていた。9 月の半ばに、発熱のため静養されていた陛下のご容態が急変して「天皇ご重体」の報が内外に衝撃を与え、陛下の平癒を祈る市民が、皇居前につめかけた。しかし、陛下はそれから何度かの危機を乗り越えてきておられた。それが前年暮れに、かなり危険な状態におちいられたと報じられ、国民は毎日公表される容態に一喜一憂していた。そして年が明けて正月の松がとれる 1 月 7 日、午前 6 時 33 分、陛下は皇居の吹上御所で 87 歳 8 ヶ月のご生涯を閉じられたのであった。

庭野開祖は、教団幹部を集めて 6 日間の喪に服すことを決めた。そして長沼理事長を伴って、すぐさま皇居の記帳所にかけつけ、弔問の記帳をして哀悼のまことを捧げた。その帰途、車の中で目をつむる庭野開祖の胸に、陛下も国民も苦しみを共にして懸命に生きてきた昭和という激動の時代が終わったのだ、という哀惜の念と､あの 8 月 15 日の終戦の日のことが卒然と浮かんできた。あの日、本部には入りきれないほどの信者さんが集まっていた。

当時､1.000 人ほどの文字どおり不退転の信心を持った人たちが会を支えてくれていたのだが、その人たちと玉音放送を涙とともに聞いたあと、一緒に読経供養をした時のことが、なぜか、昨日のことのように思いだされた。終戦によってそれまでの価値観が崩壊し、これからどうなっていくのだろうかという不安もあったが、菩薩道を歩むことの大切さだけは絶対に変わらないはずだという信念が、さらに強くなってきたのをはっきりと覚えていた。

第 124 代裕仁天皇は、まさに激動の昭和とともに歩まれたお方だった。明治 34 年のお生まれで、庭野開祖より 5 歳年上の天皇のご即位は、25 歳の時であった。その即位の大礼の直前、中国進出を意図した軍部によって中国軍閥の実力者の爆殺事件が起こった。陛下は、即位とともに独走し始めた軍と対峙する試練に直面され、さらに、昭和恐慌に見舞われるという波乱の時代に向き合われたのだった。

まもなく満州事変から日中戦争、そして太平洋戦争へと突入した日本は、ポツダム宣言を受諾して終戦を迎えた。激動につぐ激動の時代をくぐられて、新憲法の下で国民統合の象徴となられた陛下は、平和国家日本の象徴として国際親善に大きな役割を果たされたのであった。**陛下の心身に刻まれたご苦悩がどれほどのものであったかを思うと、涙せずにはいられない。戦後、ここまで復興してきた国民の努力と協力も、陛下がただひたすら国民を思われる、そのみ心の賜物であったと言っていいだろう。陛下は「戦争の昭和」を「平和の昭和」に生まれ変わらせる大業を成し遂げられたのである。**

昭和天皇の崩御にともない、皇太子明仁親王殿下が第 125 代の皇位におつきになり、新元号が「平成」と定められて、新時代の幕が開いた。**「内平かに外成る」「地平かに天成る」という中国の古書の言葉を出典とする「平成」という年号は、内が平和であってこそ外に平和を築けるという意味とも解せる。**仏教でいう平和は梵語で「シャーンティ」(寂静)すなわち、力によらない心の平和を第一としている。もっとも、英語の「ピース」にも寂静とか安心といった意味があるというから、「シャーンティ」と「ピース」は一人ひとりの心に平和を築いてこそ真に平和な社会、平和な世界が招来されるという概念では通底しているのかもしれない。

≪メルボルン会議≫

昭和天皇崩御に際して六日間の喪に服した庭野開祖は、1 月 17 日、オーストラリアに向かった。1970 年の第 1 回京都会議以来、ルーベン(ベルギー・1974 年)、プリンストン(アメリカ・1979 年)、ナイロビ(ケニア・1984 年)と回を重ねてきた世界宗教者平和会議の第 5 回世界会議が、22 日から 6 日間にわたり、メルボルン郊外にあるモナシュ大学を会場として開かれるのである。メルボルン会議の基調テーマは､**「平和は信頼の醸成から・・・宗教の役割」**と定められた。

世界 82 ヶ国から諸宗教の代表 600 人が参加した大会の開会式で、庭野開祖は仏教の「諸法無我」の法門を引用して挨拶をした。**「この宇宙、この世界に存在するすべてのものは、他と関係なしに存在しえないというのが、仏教が明らかにしている真理の一つであります。そして、その真理を自覚し、それにのっとって生きる時に真の平和が実現すると仏教は説きます。この、すべてのものが関係しあい支え合っている関係を、仏教では「縁」と表現するのです」。**

(つづく)

渉外部からのメッセージ

今年の春は徐々に暖かくなるというよりは、爆弾低気圧があったように暖かくなったかと思えば、また一気に冬のような寒さに戻り東北では大雪が降るような天候が続いています。もともとこの時期は朝の外出時の服装と昼の服装に悩むことがあるのですが、今年は特にその傾向が強いようです。一日の内に夏と冬が来るような天候はまるでアフリカの高地を想像します。まさに毛布の大切さが身にしみて実感出来ます。

この月報はホームページでもご覧頂けます。

アドレスは http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/kyoto/